

清和文楽人形芝居保存会（地域文化活動部門）



概

要

設立年月

昭和二年三月

会長

佐藤 文夫
（朝日座之し之再興）

会員数

十五名

所在地

熊本県上益城郡清和村

主な活動地

県内

電話番号

〇九六七―八二―二三六一

佐藤 文夫方

大平二〇五五

これまでの活動歴

- ・昭和二年二月
- ・昭和三十一年七月
- ・昭和五十四年十月
- ・昭和五十八年八月
- ・昭和六十二年三月
- ・昭和六十二年十一月
- ・昭和六十二年十月
- ・平成二年五月
- ・平成三年五月
- ・平成四年四月
- 十一月

朝日座として再興し、御大典記念初公演を行う。
 清和文楽人形保存会に改める。清和村無形文化財に指定される。
 熊本県重要無形文化財の総合指定となる。
 清和文楽人形芝居保存会に改める。
 文楽の里まつりはじまる。以後毎年異なつた外題に挑戦し復活させる。
 東京銀座熊本館で開館記念公演
 熊本県文化財功労者表彰を人形芝居の伝承に貢献したとして受賞
 徳島県立郷土文化会館で里帰り交流公演
 熊本県立劇場で公演
 熊本県立劇場主催八千代座公演
 熊本県立劇場主催勢井神社公演
 熊本県立劇場主催牛深市公演
 熊本県立劇場主催津奈木町公演
 清和文楽館落成。以後毎月二十回程度、年間約二百五十回の公演を続けている。
 地域文化功労受賞

昭和二年に朝日座として再興。貧弱であつた人形道具を充実するため、昭和二年から昭和二十六年にかけて五座より人形道具一式を購入している。この際、座員は牛を売つてお金に換え、また米を出合つて購入している。本業の人形一座が時代の変遷とともに興業をやめていく中で、興業をしながら買い求め充実を図つたことが、熊本県内に唯一の人形芝居として保存された大きな要因である。
 太平洋戦争時は休止をやむなくされたが、戦後は占領軍の検閲を受けながらも、各地で公演をしている。当時の検閲料は四百円とあり、座員には大きな負担であつたろうと思われる。
 昭和二十年代頃までは、村の祭りなどで公演されていた。しかし、祭りも都市の興業社が招かれるようになると、祭りでの公演は少なくなり、衰退しつゝあつたが県内各地の招請に応えながら年に五回ないしは十回ほどの公演をして、技術の伝承を図つてきた。
 昭和三十年には三味線の弾き手が途絶え、公演もままならなくなつたが、大阪の文楽座についてを求めて録音を取り寄せ、公演をするなど大きな試練を乗り越えてきた。昭和五十四年、村の振興策として、人形芝居を中心にした「文楽の里づくり」が始まり、昭和五十八年には、文楽の里まつり公演も実現し年々続けている。
 また、農産加工品あるいは農産物の商標として使用することに協力し、熊本県立劇場をはじめとして各地での公演の際、農産物の促進販売などを行うなど、清和文楽を目玉とした村おこしで、地域振興に大いに寄与した。
 このように人形芝居の伝承には並々ならぬ苦勞を重ねているが、練習も仕事や家事が終わつたあとで座員の家を持ち回りで練習している。清和文楽館が完成した今日では、清和文楽館の舞台で、夜、練習をしている。また太夫を養成するために兵庫県の淡路へ二年間、派遣した。平成八年四月から二人目の太夫を採用するなど充実を図っている。
 長い年月の中で、時代の要請に心えたり、あるいは厳しい試練を乗り越えながらも、現在まで人形の操りの技術を伝承してきたことは大きな功績であり、今後も地域文化の振興と発展に果たす役割は大きいものである。